

2024（令和6）年度

国 語

13：30～15：10

文 学 部

国 文 学 科

一般選抜(中期日程)

注 意 事 項

1. 合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. 問題は1～12ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、よごれの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された解答欄に記入しなさい。
5. この冊子は持ち帰ってさしつかえありません。

問題は次のページ
から始まります。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私は戦後ほぼ八年、囚人としてシベリヤに抑留され、その期間に、事実上失語状態に近い経験をしました。失語状態に「近い」というのは、あれが失語状態だといまもつてはつきりいい切ることができないからです。はつきりそう指摘できないからこそ、失語状態だといえるのかもしれませんが、この失語状態には部分的な記憶喪失がともなっていて、ながいながな道は何年もちどりなおしてみても、ああ、あの時はすでにことばを失っていたんだ、とやっといえるような状態だったわけです。確認するなどといえる状態ではありません。というのは、失語を確認するためにもまた、ことばが必要だからです。

ですから、私自身の失語への反省は、日本へ帰ったのち、私自身ことばを回復して行く過程ですこしずつ始まったといえます。私は昭和二十四年初め、刑法五十八条——これはいわば国事犯にテキヨウされる条項ですが——で起訴されて、判決まで約二カ月間独房にシユウヨウされましたが、いま考えてみると、私の失語状態はすでにこのときから始まっていたような気がしますが、それはまず、自分の運命にたいする切実な関心と不安のなかで、ことばだけが空まわりするといった状態ではじまったわけですが、そういう過程でことばがすこしずつ脱落して行く状態は、けっして自覚されません。というよりは、自覚することは不可能です。

自覚された状態としての失語は、新しい日常のなかで、ながい時間をかけてことばを回復して行く過程で、はじめて体験としての失語というかたちではじまります。失語そのもののなかに、失語の体験がなく、ことばを回復して行く過程のなかに、はじめて失語の体験があるということは、非常に重要なことだと思えます。「ああ、自分はあるとき、ほんとうにことばをうしなっただのだ」という認識は、ことばが取りもどされなければ、ついに起らないからです。

ですから、失語のほんとうの苦痛は、ことばが新しくはじまるときに、はじまるわけです。ことばを回復すること自体は、けっしてよることばらしい過程ではありません。田村隆一の詩に「ことばなんかおぼえるんじゃない」ということばがあります。が、この痛切な悔恨が、じつはことばによって行なわれていることに注意してほしいと思えます。

私にとって、もっとも苦痛な期間は、ほんとうは八年の抑留期間ではなく、帰国後の三年ほどのあいだであったのですが、このことを理解するためには、肉体の麻痺状態を考えてもらうのがいちばん早いと思います。麻痺というのは、つまり感覚の麻痺、いちばんわかりやすいのは触覚ですが、健康な皮膚が正常な感覚をたもっている状態は、いうまでもなく自然で、よろこばしい状態です。それから、皮膚がまったく感覚をうしなつて、なんの苦痛も感じなくなった状態も、それなりに自然です。なによりも、苦痛がないということは、それ自身が救いですから。しかし、いったん麻痺した感覚が、徐々にもどってくるそのあいだが、どんなにいやな、苦痛なものであるかということは、たとえば足のしびれなどの経験で、すでに知っておられると思います。ことばが回復するということは、いつてみれば、こういう状態だといえます。また、感覚が徐々に麻痺して行く過程を、私たちがほとんど自覚しないということも、失語の過程と非常に似ています。

失語という過程について、私が関心をもつもう一つの問題はそれが周囲の人間とは無関係に起る、完全に孤独な出来事だということBです。私は囚人として、強制収容所という圧倒的な環境のなかで、いわば集団として失語状態を経験したわけですから、失語そのものは、一人の個人について固有に起つた、たしか考えられません。周囲の人間に無関係に、という理由は、ことばをうしなう過程そのものが、人間にたいする関心をうしなつて行く過程でもあるからです。

では、ことばというものは、一人きりになった人間にとって、どういう意味をもっているのでしょうか。通常ことばは、人間と人間を結びつけるための手段と考えられています。しかし、私がそのとき置かれていた条件のなかで、ことばの機能をもう一度うたがいがながら追いつめて行くと、ことばは結局は、ただ一人の存在である自分自身を確認するただ一つの手段である、という認識に到達せざるをえません。ことばは結局は、自分自身を納得するために、自分自身へつきつける疑問符とならざるをえません。

私は、受刑直前の二カ月間、独房で自分自身と向きあうしかシヨザイ^⑤のなかつたとき、ひっきりなしにひとりごとをいうくせがつきました。そのとき私は、とりもなおさず、自分自身を納得するためのことばに向きあっていたのだと思います。それは、はやりのことばでいえば、「死^(注1)んでもらいます」であり、「生きてもらいます」であつたわけです。失語ということが、結局は

孤独な出来事であるというのは、こういった自己確認の手段としてのことばを、私たちがうしなうて行くことにほかならぬからでもあります。

現在は、すべてうしなわれることによって象徴される時代です。うしなわれるのでなければ、現代でないように考えられている時代です。でも、うしなうということは、資格でも特権でもない。このような錯覚から、どんなにしても私たちはぬけ出さなければならぬと私は考えます。

ただ、こういうことはいえます。平凡なことですが、ものの価値は、それがうしなわれてみて、はじめてわかる、うしなうということが、いうまでもなく不幸なことです。しかし、その不幸なことによってしか、私たちは、ものごとの存在の重みを知ることができないのです。

ただ私たちには、うしなうということは奪われることだという、被害的発想がげんとしてあります。失語というばあいでも、それはおなじです。しかし、ことばを私たちがうばわれるのではなく、私たちがことばに見はなされるのです。ことばの主体がすでにむなしから、ことばの方で耐えきれずに、主体である私たちを見はなすのです。見はなされる主体としての責任は、さうごまで私たちの側に残ります。これが、失語という体験を一般的状況のなかへ風化させないで、だれがことばを失ったかという問いを、さうごまで自分自身へ保留するための、いわば倫理であると私は考えます。

いま私は、ことばは自分自身を確認するためのただ一つの手段であるといいましたが、それは、ことばがその機能を最終的に問われる、もつとも不幸な場においてのことです。もし、もつともよろこばしい場でそれが問われるのであれば、それは、一人の人間が一人の人間に語りかけるためのことばでなければならぬと、私は考えます。

私たちには、ことばはつねに、多数のなかで語られるものだという気持がありますから、ことばをうしなうことは、人間が集団から脱落することだと考えるわけですが、ことばはじつは、一人が一人に語りかけるものだと私は考えます。ことばがうしなわれるということはとりもなおさず、一人が一人へ呼びかける手段をうしなうことだと考えます。

いまは、人間の声はどこへもとどかない時代です。自分の声はどこへもとどかないのに、ひとの声ばかりきこえる時代です。

日本がもつとも暗黒な時代にあつてさえ、ひとすじの声は、厳として一人にとどいたと私は思っています。いまはどうか。とどくまえに、はやくも拡散している。民主主義は、おそらく私たちのことばを無限に拡散して行くだろうと思います。腐蝕するという過程をさえ、それはまちきれない。たとえばオンネン^⑦というすさまじいことばさえ、あすは風俗として拡散される運命にあります。ことばが徐々にでも、腐蝕して行くなら、まだしも救いがある。そこには、変質して行くにもせよ、なお持続する過程があるからです。持続するものには、なおおのれの意志を託することができると、私は考えます。私自身、そのようにして、戦争を生きのびて来たと思えるからです。

私事^⑧になりますが、私がなぜ詩という表現形式をえらんだかというところ、それは、詩には最小限度ひとすじの呼びかけがあるからです。ひとすじの呼びかけに、自分自身のすべての望みを託せると思つたからです。ひとすじの呼びかけと私がいうのは、一人の人間が、一人の人間へかける、細い橋のようなものを、心から信じていたためでもあります。

いずれにしても、ことばのこのような機能をうしなうということは、とりもなおさず私自身を確認する手段をうしなうことであり、また一人の相手を確認する手段をうしなうことであります。それはこの世界で、ほとんど自分自身の位置をうしなうにひとしい。位置をうしなつて無限にただよつて行くことにひとしいことです。これが、失語という状態のさいごの様相であると私は考えます。

日本へ帰つて来てから私が読んだもので、大きなシヨウゲキ^⑨を受けた書物が二冊あります。ひとつはフランクルの『夜と霧』、もうひとつは大岡昇平^(注2)の『野火』ですが、帰国後、自分自身の強制収容所体験を問ひなおして行く過程で、私はこの二冊の書物から大きな影響を受けました。

私は批評家ではないので、『野火』について多くを語ることはできませんが、ここにも失語について、きわめて示唆に富んだ場面を見ることができます。『野火』を読みはじめたとき、とつさに私が考えたことは、人間はことばをうしなうとき、同時に行方をうしなうということでした。この作品の主人公である田村一等兵がことばをうしなうきつかけが、彼が直屬する下士官の罵倒^⑩によつてはじまることは、きわめて象徴的だといえます。

それが憎しみであるにせよ、そこにはさいごのことがあつた。彼は一人のなま身の人間との対話が、たとえどのようなみじめなものであつても、しばらくのあいだ、それができなければあと数分間でもつづくことをねがったわけです。たぶん、その願望はすでに願望であることをこえて、この世とのきずなのはしをすこしでもにぎっていたという、祈りのようなものであつたらうと思ひます。人間というものは、いよいよよとなると、おそろしいほど直感がはたらきます。人間が人間の生存の条件に無限に接近するのは、人間と動物がおなじになるシユンカン^②かもしれません。

それが対話の宿命です。一人と一人の人間が、もはやお互いに通じなくなつたことばで、やっと最小限度の意志を伝えようとするシユンカンです。それが絶望的になつたとき、彼は、ことばの機能を自分ひとりのものとして担いなおす。つまり沈黙されたことばによつて、個としての存在をまもろうとするわけです。

私は、ひとりぼつちで混乱のただなかに立たされた人間の立場というものに、痛いほどの関心をもつわけですが、連帯をたち切つてくるのは、かならず向う側からです。私、たち、側からではありません。そして私たちは、向う側からたち切られた連帯を、もういちどこちら側からたち切りなおす、という念の入つたかたちで、はじめてひとりぼつちになるわけです。

この、たちきりなおすという行為を、私は、納得とか承認とかいふことばで呼ぶわけですが、でも、もともとそれは、自分からのぞんだ孤独ではなく、いわばみれんがましく置かれた立場としての孤独ですから、それは X と求心が均衡する位置で、たえまなくゆれうごいています。孤独が不安であるのは、こうした理由からかもしれませぬ。ここでは、ひとつの決意と姿勢としての沈黙から、失語への移行が、すでにはじまっています。人は、みずからの意志によつて沈黙するとき、すでに失語への一歩をふみ出しているといえます。

私はいままで、失語という状態に即してお話しして来たわけですが、失語についてさらに語ろうとすれば、結局は語ること自体がさいげんもなく失語状態そのものに近づいて行かざるをえません。それは、ことばが拡散されて行く状態を、おなじく拡散されつつあることばで語るから、当然そうなるわけで、ここにも、ことばをことばで語ることの不毛性というおとし穴があるわけです。そしてこれは、とりもなおさず、今日私たちがおかれてある言語的状况でもあります。

D
このような状態から、徐々に、あるいは急激に私たちがたちなおって行く過程には、ほとんどのばあい、異様な、重苦しい沈黙がともないます。病気がなおって行く過程が、逆に病気がおもくなつて行く過程であるかのような錯覚がつづき、さいごにその頂点に、ひとつの意志がしつかりスエ^⑩られます。そのときはじめてことばが回復され、自覚した行為としての沈黙がはじまるわけです。失語状態への苦痛な反省がはじまるのは、このときからです。ことばが回復するということは、ある状態から解放されることではなく、逆に、ふたたびその状態へ、自覚的にかかわり、とらえられて行くことを意味します。ことばを回復するということ自体は、けつしてよろこばしい過程ではないということは、こういった意味においてなのですが、沈黙がふたたび発語の次元にまで高められるためには、回復して行くことばによって、失語状態を確認するということがどうしても必要だと、私は考えます。それは一人の人間として自立して行くためにも必要です。

ことばがさいげんもなく拡散し、かき消されて行くまっただなかで、私たちがなおことばをもちつづけようと思うなら、もはや沈黙によるしかない。そして、そのようにして自分の内部へささえたことばは、一人の自己を確認するためのことばであり、ひとりの対者、一人の敵を確認するためのことばでなければならないと思います。

(石原吉郎「失語と沈黙のあいだ」による)

(注)

1 「死んでもらいます」——一九六五年から七二年にかけて公開された任侠(ヤクザ)映画『昭和残侠传』シリーズに由来する。主演の高倉健による「死んでもらいます」という作中の台詞が流行語となった。

2 大岡昇平の『野火』——一九五二年に創元社から刊行された長編小説。第二次世界大戦末期のフィリピン・レイテ島を舞台に、主人公の日本軍兵士が直面する戦争の現実と極限状態における人間を描いた戦争文学。

問一 傍線部㉞㉟の漢字に読みがなをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「失語のほんとうの苦痛は、ことが新しくはじまるときに、はじまる」とはどういうことか。六〇字程度で説明しなさい。

問三 傍線部B「それが周囲の人間とは無関係に起る、完全に孤独な出来事だ」とはどういうことか。本文の言葉を用いて六五字程度で説明しなさい。

問四 傍線部C「ことばの主体がすでにむなしいから、ことばの方で耐えきれずに、主体である私たちを見はなす」とあるが、このとき「ことばの主体」はどのような状態にあるか。八〇字程度で説明しなさい。

問五 空欄Xに入る言葉を書きなさい。

問六 傍線部D「このような状態から、徐々に、あるいは急激に私たちがたちなおって行く過程には、ほとんどのばあい、異様な、重苦しい沈黙がともないます」とはどういうことか。「このような状態」の指示内容を明らかにした上で、九〇字以内で説明しなさい。

(二)

次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

〔待賢門院中納言の局は〕小倉を住み捨てて、高野の麓天野と申す山に住まれけり。同じ院の帥の局、「都のほかのすみか訪ひ申さでいかでか」とて、分けおはしたりける、ありがたくなん。帰るさに粉河へまゐられけるに、〔西行が〕御山より出であひたりけるを、「しるべせよ」とありければ、具し申して粉河へまゐりたりけり。「かかるついでには、今はあるまじきことなり。吹上見ん」といふこと、具せられたりける人々申し出でて、吹上へおはしけり。道より大雨風吹きて、興なくなりにけり。さりとては吹上に行きつきたりけれども、見所なきやうにて、社に興かきすゑて、思ふにも似ざりけり。「能因が『苗代水に堰き下せ』と詠みて、言ひ伝へられたるものを」と思ひて、社に書きつけける、

② 天降る 名を吹上の 神ならば 雲晴れ退きて 光あらはせ

苗代に 堰き下されし

A

とむるも神の 心なるべし

かく書きつきたりければ、やがて西の風吹きかはりて、忽ちに雲晴れてうらうらと日なりにけり。「末の世なれど、志いたりぬることには、しるしあらたなりけること」を人々申しつつ、信おこして、吹上、和歌の浦、思ふやうに見て歸られにけり。

〔『山家集』による〕

(注)

待賢門院中納言の局……生没年未詳。鳥羽天皇の皇后待賢門院(一一〇一〜一一四五)に出仕。門院落飾とともに出家。門

院崩御の後には小倉山麓に庵を結び、後高野山麓天野に隠棲。中納言葉室顕頼の女ともいわれる。

天野……天野山金剛寺があり、女人高野といわれた。

同じ院の帥の局……待賢門院帥の局。備後前司季兼の女。待賢門院崩御後はその妹の上西門院に出仕した。

粉河……紀伊国(和歌山県)那賀郡にある粉河寺。

御山……高野山のこと。

吹上……吹上浜。紀の川左岸から雑質にかけての砂浜で、歌枕(古歌に詠まれた名所)の一つ。社に輿かきすゑて……吹上神社の社殿に乗り物を担ぎ下ろして。

能因……平安時代中期の歌人。諸国を行脚し歌枕を訪ねた。

苗代水に堰き下せ……伊予の国にまかりたりけるに、正月より二三月まで、いかにもあれ雨の降らざりければ、(中略) 守、能因を歌よみて一宮にまゐらせて祈れと申しければ、まゐりてよめる 能因法師 天の川苗代水にせきくたせ

あまくだります神ならば神 神感ありて大雨降りて三日三夜をやまざる由、家集に見えたり。(『金葉集』雑下より) 和歌の浦……紀伊の国の歌枕で、和歌の神である玉津島明神がある。

問一 傍線部ア「都のほかのすみか訪ひ申さでいかでか」、イ「しるべせよ」、ウ「今はあるまじきことなり」、エ「やがて」、オ「しるしあらたなりけること」をそれぞれ現代語に訳しなさい。

問二 波線部 a、b、e の「れ」と c、d の「られ」について、助動詞としての意味を次の語群からそれぞれ一つずつ選んで答えなさい。また、「尊敬」を選んだ場合は筆者の「誰に対する」敬意を表わしたものかも答えなさい(文中の呼称で答えること)。

語群 受身 可能 尊敬 自発

問三 破線部①「思ふにも似ざりけり」について、何が、どのように思っていたことと違ったのかを具体的に説明しなさい。

問四 破線部②「天降る 名を吹上の 神ならば 雲晴れ退きて 光あらはせ」という和歌について、詠者である西行のこの和歌に込めた意図がわかるように現代語に訳しなさい。

問五 空欄 A に入る最も適切なことばを書きなさい。

(三)

次の漢文を読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上送り仮名を省略した箇所があります。

晋文公伐原、与士期七日。七日而原不下。命去之。謀士言
 曰、原将下矣。师吏请待之。公曰、信国之宝也。得原失宝、吾
 不為也。遂去之。明年復伐之。与士期必得原、然後反。原人聞
 之、乃下。衛人聞之、以文公之信為至矣、乃歸文公。故曰攻原
 得衛者、此之謂也。文公非不欲得原也。以不信得原、不若勿
 得也。必誠信以得之、歸之者、非獨衛也。

〔呂氏春秋〕による

(注) 原——国の名。

問一 傍線部A・B・Cの読みを、平仮名で答えなさい。送り仮名のつく語はつけて答えなさい。

問二 傍線部①は「原を攻めて衛を得たりと曰ふは」と読みます。この読み方にしたがって、解答欄の白文に返り点をつけなさい。(送り仮名不要)

問三 傍線部②は、具体的にはどのようなことを言っているのか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。